

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料

第135号

毎月発行

発行 2023年(令和5年)8月16日 水曜日

2023年(令和5年)8月16日 水曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、69歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。はいえ新コロナ禍を乗り越えて4作目制作に向けて闘文化研究。埋もれた歴史を掘り出すことを標榜。



オール東北で今後ひっ迫する半導体人材を育成する 事業を立ち上げようではないか！できれば女性技術者 や開発者を育成して東北に定着させ人口増も狙おう！

再びの東北再興と半導体産業

今回の記事は、東北再興と半導体産業という当新聞で何度か取り上げたテーマの続編である。
再び取り上げたのは、最近、世界の半導体業界の動きが以前よりさらに激しく、ダイナミックになってきているからである。

しかも一過性の出来事ではなく、一世代以上続いていく動きであるとも思える。そうしたところに東北再興のチャンスが見いだせないかとの観点から、再度このテーマを取り上げた。

東北半導体産業人育成兼人口増大の提案

この記事の「結論」に到達するまでの前置きが長くなるので、先に「結論」を箇条書きで提示することにします。

① 世界では、最先端半導

体の主導権を握ろうと半導体生産工場の誘致が活発化しているが、東北では、最先端半導体生産はキオクシア(若手・北上)だけにどめて、東北が目指すのはこれから世界的にひっ迫する半導体開発・製造に関わる人材育成のみに特化する

② オール東北で、工業高校・高専・大学・職業訓練学校の連携網にて、今後急速に膨らむ半導体関連人材需要に対応すべく即戦力の人材育成事業を立ち上げ、日本はもとより、世界に送り出していく

③ 上記②実現のため、数百工程にも上る半導体製造工程すべてをカバーできる半導体開発・生産実務スペシャリストを、教育者として、国の内外から東北に呼び寄せる

④ 上記の人材育成機関には、国内外の学生を集めるが、なかでも、特段の優遇措置を講じて、東北内はもちろん、他の地方からも、女性の半導体技術者・開発者候補生を集めることに集める

⑤ 半導体製造の一連のプロセスである数百工程に関わる「周辺企業」を東北に誘致して、上記で育成した人材の東北内定着を促す

⑥ ④および⑤により、東北に徐々に女性を増やし、東北内に定着させることにより、東北の人口減少対策とする

⑦ 2ナノの最先端半導体、あるいはAI半導体などを中心とした米中間の最先端半導体をめぐる主導権争いが引き起こす波紋は最近非常に大きくなっている。その波紋はどんどん拡大し続け、もう元のさやに戻ることはけつてないだろう。

さらに、その波紋の広がりには米中間にとどまらず、世界中を巻き込んでいる。そして、近い将来における世界の半導体生産地図は大きく書き換えられようとしている。そうした動きはいまや激

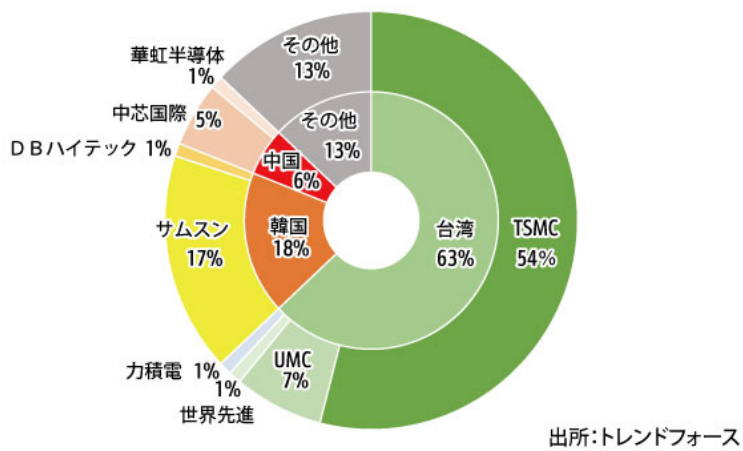
日本の半導体 世界シェアは大きく下がった

1988年のシェア	2019年のシェア
日本 50.3%	日本 10.0%
米国 36.8	米国 50.7
アジア 3.3	アジア 25.2

1992年の 売り上げランキング	2019年の 売り上げランキング
1位 インテル	1位 インテル
2位 NEC	2位 サムスン電子
3位 東芝	3位 SKハイニックス
4位 モトローラ	4位 マイクロン・テクノロジー
5位 日立	5位 ブロードコム
...	...
7位 富士通	9位 キオクシア

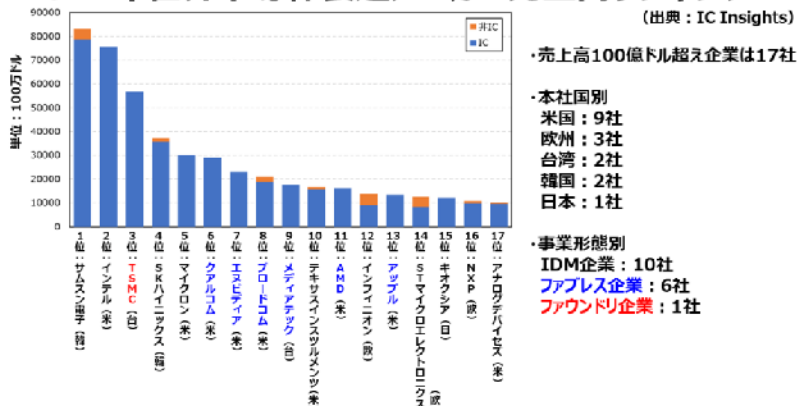
経済産業省の資料から。●が日本勢

2020年の世界ファウンドリー市場のシェア



『2020年の世界ファウンドリー市場のシェア』トレンドフォースより...台湾が過半数

2021年世界半導体製造メーカー売上高ランキング



『2021年世界半導体製造メーカー売上高ランキング』...IC Insightsより...日本メーカーは1社のみ

日本の半導体 世界シェアはは大きく下がった』あさがくナビより...かつての栄光はいつこに？

烈と表現すべきレベルであり、各国の生死を賭けた戦いと化している。

なぜならば、最先端半導体の主導権を握る国は、半導体の販売だけでなく、それらの半導体を組み込んだあらゆる製品の主導権を握るにとどまらず、世界の経済も、軍事の主導権も握ることに直結するからである。

最先端半導体を高額で購入せざるを得ないし、それを組み込んだ製品も同様で、さらには先端軍事品も同様となり、経済は「掌握国」に完全に従属的となる。

そして最先端半導体での負けを、国家全体の構造問題として、十年どころか数十年先までも引きずることになるのである。

さらに、半導体を購入するためには主導権掌握国との「同盟関係」を結ばなくてはならないのだ。「同盟関係」から排除され、かつ戦いに負けた国々は、最も悲惨である。

戦いの勝者と敗者の経済格差は目を覆うばかりとなる。それも、長い時間をかけて徐々に貧乏国になるのではなく、負けた途端に急激に貧乏国に急降下するのだ。だから、どの国々も必死なのである。

各国の先端半導体戦略

最先端半導体の設計分野はともかく、生産面ですつとトップを走り続け、生産

の世界シェアが五十パーセント以上を占めている台湾のTSMCに追いつこう、あるいは、すぐには追いつけないが、自国に生産工場を誘致しようという動きは世界的に激しい。

中国による台湾武力侵攻が現実的となっているので、他の国々に時間的な余裕はなくなっている。

中国が台湾に武力侵攻して、TSMCを傘下に組み入れたとしたら、世界の半導体も経済も軍事も中国に完全に支配される構図は目に見えている。

だから、その武力侵攻を阻止するか、あるいは、TSMCの生産ノウハウを自国に「輸入」しようと躍り上がっているのだ。

アメリカは、これまで海外に出していた半導体生産を、一転して国内に回帰させようと、何十兆円という巨額の助成金を投入して、世界の半導体メーカーをアメリカ国内に呼び寄せようとしている。TSMCも当然含まれる。

ヨーロッパも負けじと、域内の半導体生産工場の誘致に積極的で、何兆円という巨額の助成金を投入すると公言し、実際にそうした進出計画が公表され始めている。もちろんTSMCも含まれている。

中国は、アメリカを中心とした「西側の壁」で、最先端半導体の設計分野もシャットアウトされつつあるので、自国内開発しか道

は残されていない。それはいばらの道となる。

しかし、中国には台湾を、そしてTSMCを武力で手に入れるという方法がある。数十年前には、世界の半導体を席巻した日本も、こうした流れに乗り遅れまいと、遅ればせながらようやく動き出した。

TSMCの熊本への工場進出。2ナノレベルの半導体開発における多国間連携や、北海道での最先端半導体生産にも着手した。

しかし、大きく水をあけられたポジションを、最先端半導体の中心部に戻すのはかなりむずかしい。でも、挑戦するしかない。

半導体人材不足は深刻

こうした状況下で東北の採るべき戦略はどれか？

日本の最先端半導体の生産への進出は、世界的に見てもきびしい。それに、熊本や北海道がすでに名乗りをあげ、計画もスタートした。そこにかなり遅れて東北が名乗りを上げては徒労に終わる可能性が高い。

東北にはすでに岩手にキオクシアという最先端半導体生産工場がある。それだけでいいと思う。

東北の戦略は、半導体開発・生産に関わる人材開発に特化していくことであると考える。その分野で世界一を目指すのである。

最先端半導体の開発や生産では後れを取っているが、何せ半導体生産には数百工

程も必要なのだ。それらの工程の半分以上に関して、東北で関連人材を育成したら、これはこれですごい半導体戦略となるだろう。

いくら自動の工場にするといつても、すべての工程を人間なしで動かすのは無理である。

すでに前述の熊本での人材難が言われている。いざ北海道でも人材難が発生するだろう。

国内だけではない。世界で半導体関連人材が大いに不足するのはまちがいない。それを見越して、オール東北で人材開発を行うというのが当新聞の提案である。

いまのところ、国内の他の地域では、この動きは本格化していない。いまこそ大チャンスである。

数百工程の半導体生産

前述のように、半導体を生産するには数百もの膨大な連続の工程がある。

したがって、半導体を最終的に組み立て製造する工場に隣接する、あるいは連携する数百の工程を担当する企業群とそこに所属する従業員がいないと半導体は作れない。

しかも、半導体製造装置も多種多様で、現在では超高度化していて、半導体メーカーでの内製はまず困難である。この面では日本は優勢である。

製造に使用される素材、化学薬品も同様であり、内製など最初から無理である。

これも日本が優勢である。したがって、半導体組み立て工場をひとつ作れば半導体が自動的に出来あがるというわけではないのだ。

半導体生産とは、数百工程もの工程を持つ壮大なネットワーク産業なのだ。いままでは、国内で半導体生産工場が複数立ち上がるとうとしており、おそらくこれらに続いて、最先端ではない生産工場も次々に出来ていくことだろう。

そのとき起きる「周辺産業」での人材不足も目に見えている。

人材不足救世主は女性

コロナ禍が終息した後、国内の人材不足があちこちの分野で騒がれている。これもまた意味で「コロナ後遺症」であると思う。

こうした状況下で、近い将来に半導体業界の人材供給難が発生することを頭にに入れて欲しいものだ。人材面での二重三重の難局が訪れようとしているのだ。

だから、この面では発想の大転換が求められている。不足する人材を海外から補充するというのも考えられるが、これは各国で取り合いになる。日本は勝てるだろうか？

それよりも、国内の女性の人材発掘に集中した方がいいのではないかと？

現在の国内半導体産業の女性比率はかなり低い。

ここ最近の動きとして、国内半導体関連企業が、女性採用を積極化しているが、まだまだである。

それはともかく、採用される女性陣の教育機関での育成はどうなっているのだ

ろう？

ここに東北の出番があると思うのである。

前述の半導体人材育成機関で、女性に特別な優遇措置を講じて、全国から、いや世界から、女性技術者や

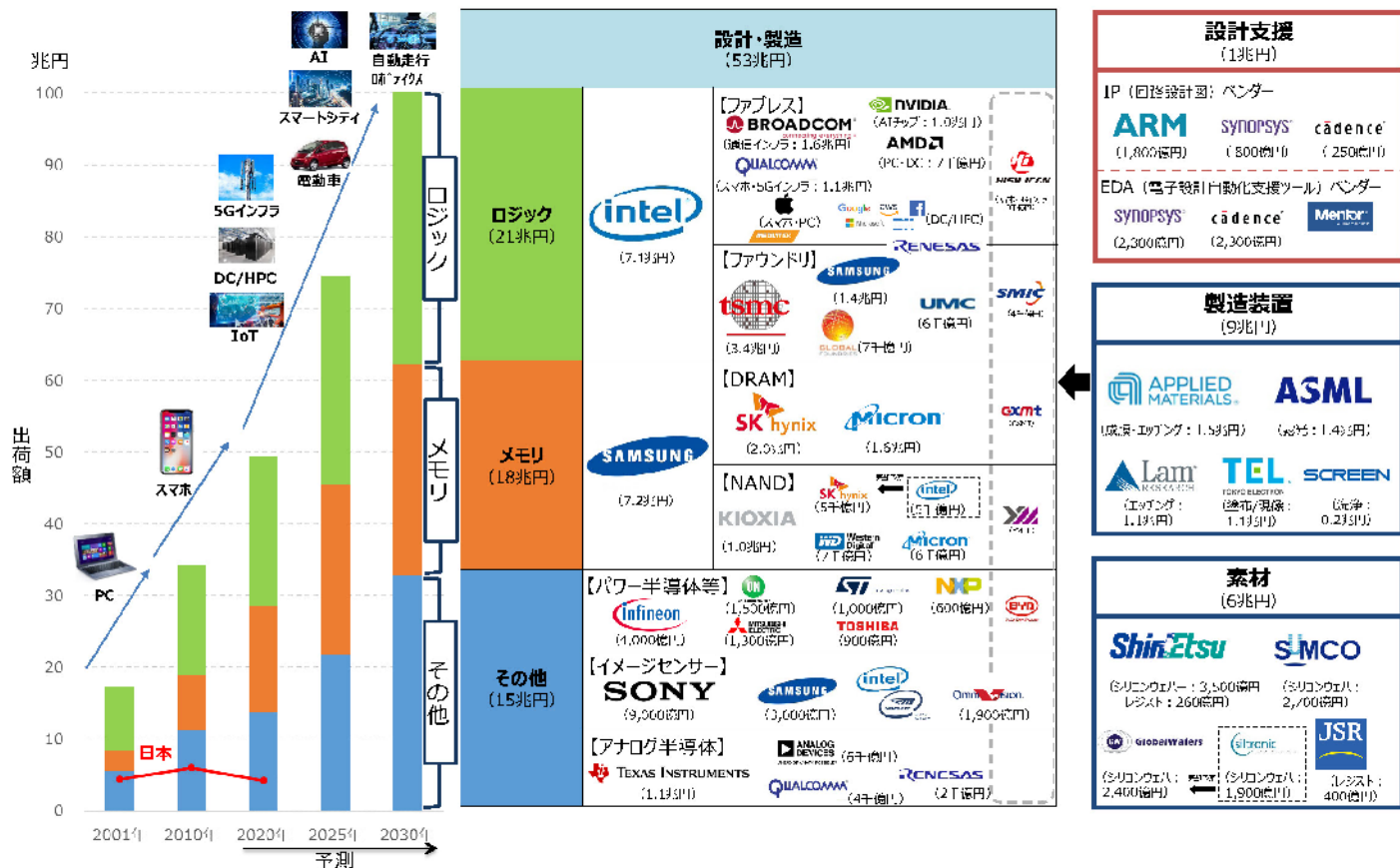
開発者候補生を積極的に集めるのである。

さらに、ここで育成した女性人材を東北にとどめておくために、前述の東北に誘致した半導体周辺企業に勤務してもらうのである。

そうならば、長年苦しんできた東北の人口減少にも歯止めがかかるのではないかと秘かに思っているのである。

世界の半導体市場と主要なプレイヤー

資料5



世界の半導体市場と主要なプレイヤー・・・経済産業省より

新シリーズ【東北を再発見する旅】…②秋田・羽後境 『異形の神社「唐松山天日宮(からまつさんあまつひのみや)」』



唐松山天日宮 (からまつさんあまつひのみや)

岩手・秋田・山形三県の「突貫横断旅行」

旅行は約九年前のことで、当時の写真を見てありありと思い出したのだが、あれはほんとに驚きの連続の旅だった。
旅行は、よく「非日常」を体験するものといわれるが、あまりにも驚きを詰め込んだために、そうした「非日常」を突き抜けて、「異界」の手前まで到達するよ
うな旅行だった。

「分刻みスケジュール」で、しかも、土地の人に聞いても分からないと返答されるような場所を数多く巡るものでもあった。
そのため、旅行全体がアドベンチャーといってもいいし、カーナビにも出てこないような場所を訪問するケースも多々あった。
この時の旅行はそのなかでも群を抜いた驚きのものになった。

同行者のための「速足で巡る観光地訪問」

いつもは単独旅行であったが、たまたまこの時は妻という同行者がいた。
そのため、せっかく岩手・秋田・山形三県を巡るのだからということで、まことに強行軍ではあったが、土地土地のいわゆる観光地巡りも行った。
まず岩手では「遠野」に行き、街を散策し、博物館を見て、地ビールもいただき、鹿踊りの競演を見て、知人にも会った。これが半日分の田沢湖駅に移動し、そこからバスで乳頭温泉・鶴の湯に行き、日帰り温泉を楽しむ、落ち着く暇もなくバスで田沢湖駅に戻って本場の秋田の「稲庭うどん」をいただいた。



「唐松山天日宮」社殿裏にある磁鉄鉱の守り石

田沢湖駅近くの角館駅で一時間ほどの電車の待ち合わせ時間が発生したので、わずか一時間だけの「角館速足観光見学」となった。
のんびり歩く一般観光客を横目に見つつ、とにかく立ち止まることなく、いつも速足で駆け巡る突貫一時間の角館観光であった。
有名観光地もこうした極短時間で廻ると印象はまったく異なるものである。

唐松神社に到着

角館からJRを乗り継いで初めて訪れる羽後境駅に着。無人駅だった。
目的地の「唐松神社」を目指し、駅に預けることが出来なかったキヤスターをガラガラ引きずって歩く。

異形の「唐松山天日宮」

参道が少し広くなったところでは、少し先に、一段低くなっているところに拝殿の上半分だけが見えた。
さらに進んでいき、左手を見てびっくり仰天した。
そこにある神社はまさに異形の構造物だった。これまでに見たどの神社にも似ていない。
大中小の大きさの石がびっしりと敷き詰められ、固



大木に囲まれたとても細くて長い参道



境内にびっしりと敷き詰められた石

められた堀のなかに浮かんだ、これまたたくさん石を土台とした神社。石の総数は十万個といわれているすごい数。「石神社」？
それは「唐松山天日宮(からまつさんあまつひのみや)」と称する。一度見

たらけつて忘れることができない神社である。
目的の唐松神社に隣接する物部家邸宅の庭園内に位置する物部家ゆかりの神を祭る神社ということであるが、出会った途端にこの神社にすべての好奇心を吸い

取られた。
秋田物部氏第六十三代当主の奥方に話を聞く
せっかくなので、社務所に寄って話を聞く。出てきたのは秋田物部氏第六十三代当主の奥方と名乗る女性



田沢湖駅

であった。六十三代とは、一代二十年としたら、何と千二百六十年？
その方の話によれば、もともと秋田物部氏はその神社から離れた山の上に代々居住していたが、佐竹氏に里へ下山するよう命じられたが、なかなか言うことを聞かなかった。しかし、業を煮やした佐竹氏に攻められそうになってようやく山を下りて、現在の地に居を構えたとのこと。

物部氏と鉱山

東北には物部氏にまつわる話はたくさんある。主として、鉱物資源関連が多い。秋田というところも鉱山の多い地域であり、さまざまな鉱物資源を産出してきた。

そういえば、社殿の裏には、子供を授かる「抱石男石」、縁結びと子宝、安産のご利益がある「玉銚石」、そして子宝に恵まれる「子宝の石」の三つの石があるとされているが、この「玉銚石」は、表面がツルツルした磁鉄鉱石である。近くで見ればよく分かる。ここからも、鉄資源と物部氏との強い結びつきがうかがえるが、もし、この磁鉄鉱がこの地産のものならば、「たたら製鉄素材としての磁鉄産出の地」として、この地はもっと注目されるべきではないかと思う。

唐松神社

さて、いまでは唐松神社と記載するが、元は韓服宮(からまつのみや)といい、神功皇后の三韓征伐で「韓国(からくに)を征服したこと」を讃えて社を建立した故事に由来するという。しかし、この神社の拝殿は「下り宮」といい、敷地より一段下がった場所に建立されている。通常は、参道を「上った」ところに神社は建立されるが、この形式では「下がった」場所である。一説によると、時の権力者に反抗したために、より低い場所、下がった地面に社を立てるように命じられたのがこの形式と聞いたことがある。そうであれば、六十三代当主の奥方に聞いた話と符合する。

東北と物部氏の関係はもっと研究されるべき

こうしてこの旅行は、唐松神社に至って、単なる旅行の枠を飛び越えた。さらに、異形の「唐松山天日宮」に遭遇して、埋もれた物部氏と東北の歴史が、地中深くから眼前に出現することとなった。少し調べれば、東北にはこうした歴史がたくさん埋もれていることを発見できるだろう。それが東北旅の魅力であり、魔力ではないだろうか？



唐松神社 下り宮



角館 武家屋敷



乳頭温泉 鶴の湯



遠野 鹿踊り競演

太平洋岸に「東北復興巡礼路」をつくろう!

「東北復興ツーリズム推進ネットワーク」の正式発足

五月一六日発行の本紙第一三二号では、「東北復興ツーリズム推進ネットワーク(仮称)」への期待と題して、J.R東日本が事務局となつて自治体や企業、団体に参画を呼び掛けて発足させた「東北復興ツーリズム推進ネットワーク」の活動への期待と、これまで進められてきた「震災伝承施設」の整備とそれをつなぐ「三・一一伝承ロード」の形成、「みちのく潮風トレイル」や「東北お遍路」といった取り組みについて書いた。

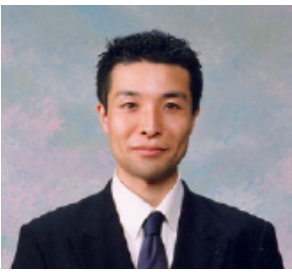
サントニアゴ巡礼路の魅力

行きつけのカレー店「こぐま食堂」で、店主の久保さんとたまたま「サントニアゴ巡礼路」の話になった。スペインのガリシア州にあるキリスト教の三大巡礼地の一つで、聖ヤコブの遺骸があるとされるサントニアゴ・デ・コンポステラへと向かう巡礼路のこと、様々なルートがあるが、フランスから主要な四つの道がスペインへと伸びており、ピレネー山脈を越えてスペイン北部を通る「フランスの道」が有名である。

「東北復興ツーリズム推進ネットワーク」は、七月二五日に仙台市内で八三の参加団体のうち六四の団体のおよそ一〇人が参加してキックオフミーティングが開かれた。これによって「仮」が取れて正式に「東北復興ツーリズム推進ネットワーク」が発足し、その他「東北復興ツーリズム」のロゴや「希望と学びを未来へ。」とのスローガンも決まったそうである。今月下旬に関係者による第一回の会合を開催して協議を本格化させ、秋には旅行会社向けモデルコースの説明会や視察を兼ねたモデル旅行などを企画する予定とのことである。

執筆者紹介

大友浩平 (おおもともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/



Facebook
https://www.facebook.com/kouchi.ootomo

いるとのことである。店主の久保さんも数年前に全ルートを踏破した経験を持つが、「もう一度行ってみたい」と言っていた。久保さんに限らず、この巡礼路は何度でも行きたくなる魅力があるらしい。

私は四、五年前に、イラストラータの中島悠里さんの「二九歳、女ひとりでスペイン巡礼してきました」を読んでこの巡礼路のことを知った。中島さんは、二〇一四年にひとりでのサントニアゴ巡礼路を歩く旅をした。八〇〇キロの道のりを三五日間かけて歩いたその道中の様子を、シンドリ山脈越え、沿道の街の様子、時には宿泊所にあふれそうになった危機、巡礼路を歩いていて知り合った人との出会いと別れなどを生き生きと描いていて印象に残った。

このサントニアゴ巡礼路のシステムがよくできていると思った。フランスからピレネー山脈を越えてスペインに入ると、巡礼の拠点となる街がある。そこには巡礼事務所があつて、巡礼者はまずそこで自分の名前を登録して、巡礼者であることの証明となる手帳を受け取ることにしている。全行程をすべて歩く必要はないが、徒歩の巡礼者は一〇〇キロ、自転車利用の巡礼者は二〇〇キロが、巡礼と認められるための最低距離となつている。沿道の街にはある宿泊所や飲食店や教会で「クレデンシヤル」というスタンプがもらえる

が、このスタンプを一日につき二個以上もらうことで、サントニアゴ・デ・コンポステラにたどり着いた時に「コンポステラ」という巡礼証明書を得ることができることになっている。街には「アルベルゲ」と呼ばれる安価で泊まれる宿泊所が整備されているが、宿泊には巡礼手帳が必要で、予約なしで着いた順に宿泊できかつ連泊はできないことになっている。

なお、スペイン国内の巡礼路は、一九九三年に「サントニアゴ巡礼路の旅は、基本的な自由である。調子が良ければひとつ先の街まで行つてもいいし、道中に気に入った場所があればその場所をゆっくり堪能して、予定よりも手前の街に泊まつてもいい。その自由さの魅力は大いにありそうである。

歩く旅に注目!

このサントニアゴ巡礼路を歩く巡礼者の数は、今世紀に入つて急増しているそうである。二〇〇二年に七万人弱だった巡礼者は、二〇一二年に一九万人を超え、二〇一八年には三三万人弱、二〇二一年にはコロナ禍にも関わらず四六万人余りとなつているとのことである。

一ヶ月以上掛けて歩く旅がこれほど多くの人に広まつていることに驚かされる。その魅力は、交通機関や宿泊施設に束縛されない自由な旅であるというところにありそうである。ツアー旅行はもとより、個人で手配した旅行であっても、鉄道や航空機、バスなどの時間に合わせて行動しなければならず、かつ宿泊は事前に予約してその日はどこに泊まるかはあらかじめ決まつている。これに対して、サントニアゴ巡礼路の旅は、基本的な自由である。調子が良ければひとつ先の街まで行つてもいいし、道中に気に入った場所があればその場所をゆっくり堪能して、予定よりも手前の街に泊まつてもいい。その自由さの魅力は大いにありそうである。

こうした歩く旅行者の急増は何もサントニアゴ巡礼路だけの話ではない。日本にも欧米からの歩く旅行者が急増している場所があるそうである。それは、旧中山道の長野県木曾郡南木曾町にある妻籠宿から岐阜県中津川市にある馬籠宿を目指す馬籠峠を越える旧中山道の街道である。宿場町の雰囲気色濃く残っていて、国内だけでなく海外、特に欧米からの観光客の数が飛躍的に伸びているとのことである。

この「東北復興ツーリズム」の例として、J.R東日本は「震災伝承と豊かな海の恵みを体験する旅」、「震災伝承施設と三陸海岸をめぐる旅」、「震災の『今』そして未来を知る旅 福島浜通りの震災伝承施設をめぐる」といったプランを挙げているが、そうした短期間のツアーとは別に、震災で被害を受けた東北の太平洋沿岸を北から南まで歩いて旅するルートを整備してはどうかと考えるのである。そう、サントニアゴ巡礼路のような。

では、具体的にどうすればいいのか。その基礎となるものは既に東北にはある。それが第一三二号で紹介した「三・一一伝承ロード」、「みちのく潮風トレイル」、「東北お遍路」である。この3つのいいところを組み合わせれば、「東北復興巡礼路」はできる。

「三・一一伝承ロード」は、震災伝承施設を網羅しては

いるが、通るべき道までは示していない。「みちのく潮風トレイル」は、青森の八戸市から福島の相馬市までを結んでいるが、サイトをみると各エリア毎に細分化されていて、一本の道という打ち出し方が弱い。また、震災伝承施設とリンクしていない。「東北お遍路」は、震災伝承施設以外にも津波の被災地として語り継ぎたい施設を取り上げているのがよい。ただ、やはりそれらをつなぐ道までは示していない。

したがって、「みちのく潮風トレイル」の道をベースに、「三・一一伝承ロード」の震災伝承施設と、それに含まれない「東北お遍路」の巡礼地を加える。サントニアゴ巡礼路を参考に、その道を歩く人には「巡礼手帳」を配布し、「三・一一伝承ロード」の震災伝承施設や「みちのく潮風トレイル」に盛り込まれた観光スポットや「東北お遍路」の巡礼地としてタンブをもらえるようにして、一定数のスタンプを集められれば、巡礼証明書を発行する。このようにすれば、「東北復興巡礼路」はつくられるのではないだろうか。

「三・一一伝承ロード」は、震災伝承施設を網羅しては

いるが、通るべき道までは示していない。「みちのく潮風トレイル」は、青森の八戸市から福島の相馬市までを結んでいるが、サイトをみると各エリア毎に細分化されていて、一本の道という打ち出し方が弱い。また、震災伝承施設とリンクしていない。「東北お遍路」は、震災伝承施設以外にも津波の被災地として語り継ぎたい施設を取り上げているのがよい。ただ、やはりそれらをつなぐ道までは示していない。

したがって、「みちのく潮風トレイル」の道をベースに、「三・一一伝承ロード」の震災伝承施設と、それに含まれない「東北お遍路」の巡礼地を加える。サントニアゴ巡礼路を参考に、その道を歩く人には「巡礼手帳」を配布し、「三・一一伝承ロード」の震災伝承施設や「みちのく潮風トレイル」に盛り込まれた観光スポットや「東北お遍路」の巡礼地としてタンブをもらえるようにして、一定数のスタンプを集められれば、巡礼証明書を発行する。このようにすれば、「東北復興巡礼路」はつくられるのではないだろうか。

では、具体的にどうすればいいのか。その基礎となるものは既に東北にはある。それが第一三二号で紹介した「三・一一伝承ロード」、「みちのく潮風トレイル」、「東北お遍路」である。この3つのいいところを組み合わせれば、「東北復興巡礼路」はできる。

「三・一一伝承ロード」は、震災伝承施設を網羅しては

いるが、通るべき道までは示していない。「みちのく潮風トレイル」は、青森の八戸市から福島の相馬市までを結んでいるが、サイトをみると各エリア毎に細分化されていて、一本の道という打ち出し方が弱い。また、震災伝承施設とリンクしていない。「東北お遍路」は、震災伝承施設以外にも津波の被災地として語り継ぎたい施設を取り上げているのがよい。ただ、やはりそれらをつなぐ道までは示していない。

したがって、「みちのく潮風トレイル」の道をベースに、「三・一一伝承ロード」の震災伝承施設と、それに含まれない「東北お遍路」の巡礼地を加える。サントニアゴ巡礼路を参考に、その道を歩く人には「巡礼手帳」を配布し、「三・一一伝承ロード」の震災伝承施設や「みちのく潮風トレイル」に盛り込まれた観光スポットや「東北お遍路」の巡礼地としてタンブをもらえるようにして、一定数のスタンプを集められれば、巡礼証明書を発行する。このようにすれば、「東北復興巡礼路」はつくられるのではないだろうか。

では、具体的にどうすればいいのか。その基礎となるものは既に東北にはある。それが第一三二号で紹介した「三・一一伝承ロード」、「みちのく潮風トレイル」、「東北お遍路」である。この3つのいいところを組み合わせれば、「東北復興巡礼路」はできる。

「三・一一伝承ロード」は、震災伝承施設を網羅しては

いるが、通るべき道までは示していない。「みちのく潮風トレイル」は、青森の八戸市から福島の相馬市までを結んでいるが、サイトをみると各エリア毎に細分化されていて、一本の道という打ち出し方が弱い。また、震災伝承施設とリンクしていない。「東北お遍路」は、震災伝承施設以外にも津波の被災地として語り継ぎたい施設を取り上げているのがよい。ただ、やはりそれらをつなぐ道までは示していない。

承施設の南限である福島のいわき市に置きたいところである。しかし、「みちのく潮風トレイル」のゴールは、いわき市より一〇〇キロも北の相馬市松川浦である。なぜ、「みちのく潮風トレイル」のゴールがいわき市でなかったのかと言えは、相馬市といわき市の間には福島第一原子力発電所があるからである。福島第一原子力発電所が立地する大熊町と双葉町は、いまだ町の大部分が帰還困難区域であり、そこを通る国道六号線は、自動車の通行は可能だが、歩行者や自転車の通行は認められていないのである。歩くための道のゴールを相馬市にしなければならなかった理由はここにある。

しかし、「東北復興巡礼路」のゴールはやはりいわき市に置きたい。いわき市も震災では甚大なダメージを受けた地域であり、かつ福島県浜通り最大の都市として避難者を受け入れ、力強く復興した街である。ゴールにふさわしい場所なのである。外部の人の立ち入り認められていないエリアは、現段階ではバス、またはJR常磐線で輸送せざるを得ないだろう。ただ、そのありのままの状況を見てもらうことにも意義はあると思う。

もう一つの問題は、いわき市にゴールを置くとして、ではいわき市内のどこをゴールにするのがふさわしいかという問題である。サントニアゴ巡礼路のゴールは壮麗な大聖堂であり、そ

の大聖堂の五キロ手前には「モンテ・デル・ゴソ(歓喜の丘)」がある。長い道のりを旅してきた巡礼者を迎えるのにふさわしい、美しい聖地の姿がそこにあるのである。

幸い、飼育している海洋生物の「疎開」が注目された環境水族館「アクアマリンふくしま」、「三・一一いわきの東日本震災展」を常設している観光物産センター「ら・ら・ミュウ」、復興のまさに灯となった塩屋崎灯台、震災の記憶を留める活動がされている「勿来の関公園」、震災でダメージを受けたつづも見修復された平安時代の建物国宝の「白水阿弥陀堂」、被災者を元気づけ、全国に復興への思いを力強く発信した「スパリゾートハワイアンズ」など、いくつか考えられる候補がある。

青森の八戸市あるいは三沢市から福島のいわき市までを、国道だけでなく歩くべき道を丁寧につないでいくと六〇〇キロを超える。サントニアゴ巡礼路よりは短い、山あり谷ありの三陸海岸から起伏の少ない仙台平野、福島の浜通りと、変化に富んだ歩き甲斐のある道であることは間違いない。もちろん、立ち寄ったどの街でも美味しいものが食べられる。国内外から大いに人々を呼び込める道となるのではないだろうか。

青森の八戸市あるいは三沢市から福島のいわき市までを、国道だけでなく歩くべき道を丁寧につないでいくと六〇〇キロを超える。サントニアゴ巡礼路よりは短い、山あり谷ありの三陸海岸から起伏の少ない仙台平野、福島の浜通りと、変化に富んだ歩き甲斐のある道であることは間違いない。もちろん、立ち寄ったどの街でも美味しいものが食べられる。国内外から大いに人々を呼び込める道となるのではないだろうか。

青森の八戸市あるいは三沢市から福島のいわき市までを、国道だけでなく歩くべき道を丁寧につないでいくと六〇〇キロを超える。サントニアゴ巡礼路よりは短い、山あり谷ありの三陸海岸から起伏の少ない仙台平野、福島の浜通りと、変化に富んだ歩き甲斐のある道であることは間違いない。もちろん、立ち寄ったどの街でも美味しいものが食べられる。国内外から大いに人々を呼び込める道となるのではないだろうか。

蝦夷もとい「弓士」たちの東北人力兵器、未来への嚆矢の事

東北関連の事ならばと思
い、食から妖怪、宇宙や軍
艦に至るまで時に「こじつ
け」感すら滲ませながら拙
稿に綴ってきた筆者である
が、どうしても手の出しづ
らい分野もある。例えば、
それはスポーツである。球
技、陸上競技、水泳など生
来ほとんど興味が持てない
私は小中高一貫して体育授
業が苦手であり、成績が良
いのは図画工作ばかり。こ
ういう極端なタイプの児童
は少数派だが一つの典型と
して時たま出現する、と小
学校時代の恩師が後に語っ
たものである。



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡
市生。札幌、東京を経て、
全国の旅の末、仙台に移
住。どの本屋に入っても、
とりあえず郷土本の棚に
向かって立ち読みを始め
る東北好きである。

野がある―激しく運動する
という事はないが、オリン
ピックにも一部採用されて
いる紛れもないスポーツ競
技、射撃関連がそれである
これはほぼ間違いなく、
少年期より夢中で観ていた
西部劇映画の影響なのだが
その多くの舞台となるアメ
リカ南北戦争前後の時代は
小銃・拳銃が前装式から後
装式へ、単発式から連発式
へと急速に進歩・転換して
ゆく画期的な時代であり、
ちょうどこの時期日本でも
徳川治世の終焉期で薩長・
奥羽越の両軍がアメリカの
新旧多彩な銃火器を購入、
国内をその轟音と硝煙で包
み大混戦の最中であった。
とは言え、私は所謂兵器マ
ニアではない。二〇世紀以
降の自動拳銃や機関銃など
には関心が及ばず、飽くま
で古い時代の生活の道具と
しての旧式銃にその愛着は
留まっていた。しかも軍艦
への興味と同様に、齢を重ね
る程に更に古い、不便な
部類に関心が移っていくの
だった―本稿では、自分
なりの「スポーツと東北」
を語るべく、個人的に歴史
上最も東北に関連深いと考
える、ある競技に焦点を当
ててみたい。

※
実はかつて東京・新宿の
歌舞伎町にエアライフル
の射撃場があり、私はどこ

で知ったものか、二〇代
いつ頃か、時折通っては数
十発の空気銃の弾を的に向
けて発射していたのである。
これは感覚的には完全に
バッテリーセンターやゴ
ルフの打ちっぱなしと同じ
もので、真剣な趣味として
の常連や酒の入った遊興客
までが気の向くままに集つ
ていたのだが、採用され
ていた競技用エアライフル
がその後所持・使用に公
安委員会の許可が必要にな
ったなどで、一九九九年に
閉鎖となつてしまった。

歌を耳の後ろまで引き絞る
必要があつて、下手をする

と眼鏡に弦が引つ掛かり矢
と一緒に飛んでいったり破
壊したりする危険がある点
も気になり、長くは続かな
かつた。その後十年以上こ
の趣味は断絶するが、近年
仙台近郊の秋保温泉にある
スポーツ公園に野外アーチ
エリー場を発見、歌舞伎町
にあつたような体制の整つ
た遊技場ではないが、少々
遠方ながら貴重な環境とし
て時たま出かけている。

弦を耳の後ろまで引き絞る
必要があつて、下手をする

型獣が人口の少ない州内に
限定的に分布しているなど
で、銃所持者の多さの割に
狩猟従事者は少ないらしい
が、日本では銃免許自体の
厳しさとともに弓による殺
傷の難しさ、「半矢」とな
つた場合いざ知らず獲物に
苦痛を与えるなどの側面か
ら畏れにおける「トドメ」
の場面のみ許可されている
状況のようである(アメリ
カでも無論半矢の事例はあ
り、動物愛護の観点から問
題視はされている模様)。

弦を耳の後ろまで引き絞る
必要があつて、下手をする

た弓という道具はそれを可
能としていたのである。
よく、武士の魂とまで形
容され、世界的にも有名な
日本刀の原型は蝦夷の武器
と言われた蔵手刀である
この刀の存在を知る層から
は認知されているが、実は
武士といえはイメージされ
る「馬」と「弓」、且つその組
み合わせである「流鏑馬」、
これ全ての起源も蝦夷であ
る可能性が高い事はまだま
だその認識が広いとは言
えないかも知れない。

弦を耳の後ろまで引き絞る
必要があつて、下手をする

以上もの距離的に命中さ
せていたという記録がある。
鎮西八郎(源為朝)など
の弓の名手と謳われた人物
は更に驚嘆すべき業績を残
しており、つまりは弓とい
う道具が劣つていないので
なく、使いこなすべき人間
の能力自体が、もしかする
と鉄砲の登場と普及の為に
減退してしまつた可能性が
ある、という事だ。皮肉に
も、文明の利器としての獵
銃を高性能化・連発式化す
る事と反比例するように、
東北のマガギ文化もまた衰
退していった。無論、そこ
には社会情勢の変化も大き
な要因としてあつたのだが
人間にとって身体の一部で
あるともいべき狩猟道具
が姿を変え、人間自体も進
化乃至退化してゆく中で、
大型獣や自然との関係も変
化せざるを得なかつたと見
るべきかも知れない。

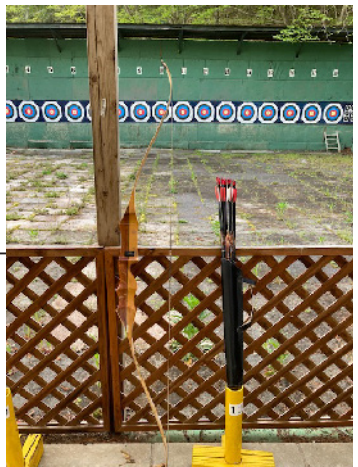
弦を耳の後ろまで引き絞る
必要があつて、下手をする

マガギ習俗が失われ、獵
銃免許が厳格化され、また
狩猟人口が急速に高齢化し
減少して、山林は放置・荒
廃し大型獣は増加、かつて
切り開かれ新興住宅地とな
つた元森林域に出没するよ
うになった。日本全域に浸
透しつつある悪循環の象徴
的な姿が、ここ東北で顕在
化しているのではないかと
そんな風に思えてならない

弦を耳の後ろまで引き絞る
必要があつて、下手をする

あり、馬の代替的・相棒的
存在であるが、自転車は人
間の能力を補完・拡張させ
る仕掛け、謂わば人間の手
足の延長的・サイボーグ義
肢的存在とも言えるものだ
オートバイならば広大な
原野をも走り抜ける事がで
き、大型獣に遭遇しても逃
げ切る事ができるが、自転
車ではそこまでの冒険をす
るにはリスクがある。弓も
同じで、現代人が山林に持
ち込み大型獣を相手にする
には大きな不安を感じるの
である。しかしながら、自
転車に関する研究や進歩は
近年目覚ましく、この人類
の歴史的には「後発」の人
力車への情熱・執着は止む
事がない。それは人間が自
らの精神・肉体に向き合い
その限界と可能性に挑む側
面がむしろ未来志向として
注目されているからではな
いだらうか。

弦を耳の後ろまで引き絞る
必要があつて、下手をする



仙台市・秋保森林スポーツ公園のアーチェリー場にて



イトトンボの産卵



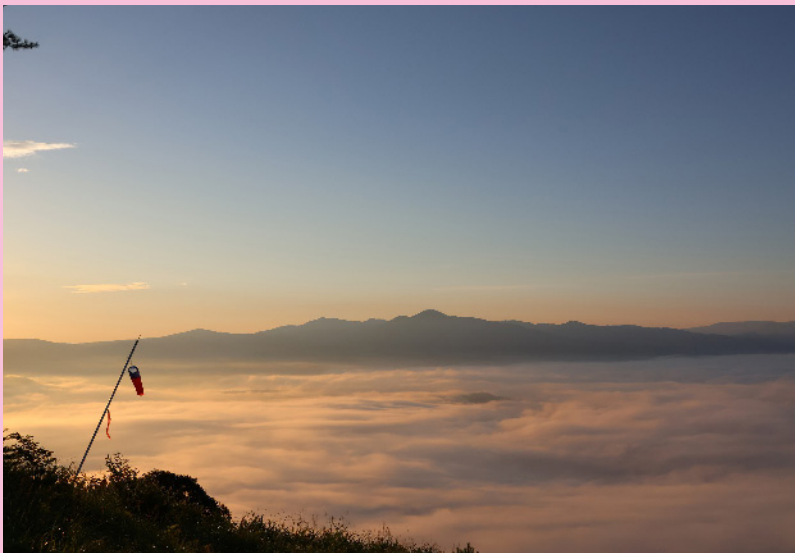
トリカブト



山道の参道



左右ネジバナ



高清水からの雲海



ヒマワリとポケモントレイン



トチバニンジンの実



ヤマブキショウマと蝶

シリーズ 遠野の自然

「遠野の立秋」

遠野1000景より

最近の天候不順に心身ともに振り回されているうちに、気がつけば一年の半分以上が過ぎ、いつの間にか暦では「立秋」である。こうして、天候が不順であるのが、順調であろうが人の思惑に無関係にあわたり

だしく過ぎ行く季節なのである。最近、地球温暖化が叫ばれているが、その温暖化という側面だけでなく、順調に循環する季節という貴重な「資源」もあるのだと誰かに主張して欲しいと思う。

それは心身の健康には不可欠な要素である。この点で、少しでも改善が見られるようになれば、我が身は何もせぬまま、時だけが無情に過ぎて行くと嘆かずにすむというものだ。



写真でお伝えする
東北の風景

「トラ、トラ、
トラ
虎舞！」

写真撮影
尾崎匠

